

SHOW HEY シネマルーム

★★★

凶気の桜

2002 (平成14) 年11月3日鑑賞

Data

監督：藺田賢次

出演：窪塚洋介／RIKIYA／須

藤元気／高橋マリ子

👁️👁️ みどころ

窪塚洋介が演ずる主人公は今時めずらしい「思想家」。アメリカナイズされてしまった今の日本では「日本の良さ」がすべて失われ、唯一残っているのは「桜の美しさ」だけだというイデオロギーをもっている。「ネオ・トージョー」と称し、白い戦闘服を身につけ、渋谷の街で「不良狩り」に精を出していた。まさに日本を「改革」するために……。しかしそこに本職のヤクザ、右翼、殺し屋が絡んできた。果たして主人公は……？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<原作あり>

私は読んでいないが、この映画の原作は『凶気の桜』（ヒキタクニオ著・新潮社刊）とのこと。そして、『GO』（2001年）で日本映画界の賞を総ナメにしたあの窪塚洋介が、この原作を読んで、主人公山口進の怒りに共鳴し、企画段階からこの映画製作に参加したとのことだ。

<「不良狩り」の狙いは>

窪塚洋介演ずる主人公山口進は日本社会の矛盾を感じている。そこで市川勝也（RIKIYA）、小菅信也（須藤元気）と共に3人で「ネオ・トージョー」と名乗る組織をつくり、白い「戦闘服」を身にまとい、渋谷の街で「不良狩り」をやっていた。それが自分たちの使命であり、不良狩りは「奪還」、「強制」、「排世」の3本柱の基本的活動なのだ。とまあ理屈はこうだが、見方を変えれば「ガキのお遊び」とも言える。

しかし「実力派」である「ネオ・トージョー」の行動は渋谷の街で有名となり、本職のヤクザ、右翼、消し屋（殺し屋）との接点が生まれてくる。そしてそれとともに次第に3

人の道は別れていく。そんな中、戦後何もかもが「アメリカナイズ」され変わってしまった中、日本社会の中でこれだけは変わっていない、と山口が言う「桜の美しさ」をベースにしなが、山口たちの「凶気」が展開されていくのがこの映画だ。

<イデオロギーという言葉に驚き>

今時、窪塚洋介のような若者が「イデオロギー」というセリフを真正面からしゃべること、またこれをテーマに据えた右翼チックな映画が作られたこと自体が驚きだが、それは若者がこのような形で警鐘を鳴らさなければならないほど、今の日本社会の矛盾は深刻化しているということだろう。レストランでまわりの迷惑も省みず騒ぎ、はしゃぐグループ。バスの中で老人に席を譲ろうとしない若者。紅一点の美人女優高橋マリ子も映画の中で「こんな今の日本人は嫌いだ」と語り、山口に惹かれていく。

いかにも極端な描き方だが、今までの「日本的価値」のすべてを喪失した感がある日本社会の矛盾を、若者の目から描いた面白い作品だ。この映画を観た若者が山口（窪塚洋介）の生き方のカッコ良さだけを見習って同じ行動に走ったら怖いという思いもあるが（もっともそんなエネルギー自体がなくなっている可能性の方が強いだろう）、この映画の問題提起を1つの素材として、若者たちが「今の日本社会のあり方はこれでいいのか」と考えれば、十分値打ちがあるというべきだろう。

<まずまずの作品か>

昔見た映画『スワロウテイル』（1996年）で面白い味を出していた江口洋介が、この作品でも「消し屋」の役割で登場し、面白くかつ重要な「大人の味」を出している。その他脇役は強い芸達者達がきちんと固めているから、若者たちの生き方の悲劇もうまく表現されている。『GO』ほどの問題提起にははならなくても、それなりの問題作としての価値はあると思う。

2002（平成14）年11月5日記